



コンコードには、『若草物語』の著者ルイザ・メイ・オルコット（1832-1888）の家があります。レキシントン通りに面した広い敷地に2棟が建ち、「オーチャード・ハウス」と呼ばれる博物館になっています。主に女性の観光客が押し寄せています。私たちも早速その一員になりました。庭にはメグ、ジョー、ベス、エイミーの名札の花壇がありました。

そうです！小学生の頃、主人公ジョーの気分になり、夢中になって『若草物語』を読みました。ニュー・イングランドのキリスト教社会で、父権的な家庭の姉妹として、貧しいながらも、助け合い、個性豊かに生きる少女たちが描かれていました。オルコットの他の作品を読むこともなく、『若草物語』だけが甘く懐かしい思い出として残っています。次の予定のため、ショップだけ覗き、玄関先に座っただけで、失礼しました。ネットでオルコットについての記述を読んで驚きました。父親は理想に生き、自分勝手に生きたこと、代わりにオルコットが家族や家計を支えて働きづめだったこと、彼女は主に恐怖・怪奇小説を書いたことなどです。体を壊したともありました。精神的、経済的に自立した女性であったのだと、感じ入りました。

次に、市沢氏はこんもりした森の中へ連れて来てくれました。「ここはどこ？」と問う間もなく、「ソローの小屋があります」と言われました。ヘンリー・ディビッド・ソロー(1817 - 1862)とは「超絶主義」のグループの中心人物であるエマーソンの友人で、彼の哲学思想を実験的に体験し『ウォールデン 森の生活』を書いた人物です。市沢氏の愛読書とのことです。



超絶主義とは**客観的な経験論よりも、主観的な直感を強調する。その中核は、人間に内在する善と自然への信頼である。一方、社会とその制度が個人の純粹さを破壊しており、人々は本当に「自立」して独立独歩の時にこそ最高の状態にある**とあります。

ここは、ソローのように自然と繋がる思いを体験する、水泳、ハイキング、ウォーキングができる「ウォールデン湖州立保護区」です。

ソローはウォールデン湖畔の森の中に丸太小屋を建て、自給自足の生活を2年2ヶ月間送ったそうです。小屋のレプリカがありました。自然に身を委ねて、個人の良心と感性に従って、自由に生きる、自分の生活は自分の手で作る、また、個人として社会に対峙する力もあれば、力強く、幸いかもしれません。これがアメリカ人の求める精神かもしれません。

湖のそばの林に囲まれた小さな家の暖炉のそばで、揺り椅子に座って本を読むのが幼い頃の私の夢でした。ソローの小屋はお誂え向きでした。でも私は小屋をDIYで建てる力はなく、台所と清潔なトイレが必須だし、網戸がなくては…と、自然と共生するのは難しく、まして、誰かに頼りっぱなしです。

